

「特色ある教育実習プログラム」の実施に関する研究 (I)

—「教育実習入門」の効果に関する調査研究—

木原成一郎	松浦 伸和	鈴木由美子	山崎 敬人
木船 憲幸	清水 欽也	小山 正孝	田島 俊造
下向井龍彦	竹村 信治	畑佐由紀子	柳原 英兒
横田 明子	濱本 恵康	内田 雅三	深澤 広明
岡本 祐子	時永 益徳	栗原 慎二	松本 徹
神野 正喜	大松 恭宏	金丸 純二	河野 芳文
原田 良三	島本 靖	木本 一成	三藤 義郎
竹盛 浩二	河野 進		

1. はじめに

(1) 「特色ある教育実習プログラム」の実施

「特色ある教育実習プログラム」は、若元澄男他(2005)により提案され、その試行的取り組みの成果と課題が、若元澄男他(2006)および木村博一他(2007)に報告されてきた。「特色ある教育実習プログラム」の概要は、表1及び表2に示した。ここに示した二つの表は、木村博一他(2007)に掲載したものと基本的に同じであるが、平成17年度および18年度の試行を踏まえて修正を加えた。

これまで平成17年度および18年度に以下の二つの試行的取組が行われ、本格的実施に向けての成果と課題が整理された。(1) 1年次の「附属教員による『すぐれた授業』の参観」(2) 2年次の「小学校教育実習観察」および「中・高等学校教育実習観察」(「中・高等学校教育実習観察」のみ試行では3年次に実施)。(1)の試行的取組は、表1の「小学校教育実習入門」および表2の「中・高等学校教育実習入門」として授業化された。また、(2)の試行的取組は表1の「小学校教育実習観察」および表2の「中・高等学校教育実習観察」として具体化された。

若元澄男他(2005)によれば、この「特色ある教育実習プログラム」の構想の背景にあった問題は、次の2点であった。第一は、教育実習に関わる科目とその

履修時期に関する問題である。現行の教育実習においては、大多数の学生は、1単位の事前指導(観察実習)と5単位又は4単位の本実習(教壇実習)を3年次又は4年次で履修することになっている。しかしそれ以前に教育実習に関する科目が開設されていないため、教員志望学生の学習意欲が低下する、教育実習での体験を反省し認識した課題を解決する機会がほとんどないという問題が指摘されていた。また4年次の教育実習は採用試験の時期に前後するため学生と附属学校園の双方から実施時期の問題が指摘されていた。この問題に対して、第1年次に「教育実習入門」、第2年次に「教育実習観察」が置かれるとともに、4年生(7セメと8セメ)の「中・高等学校教育実習」が3年生(6セメ)に移行して実施されることとなった。

第二は、教育実習の実施校園に関する問題である。若元澄男他(2005)によれば、「附属学校園における教育実習はその質的な面の保証という点で多大な意義を有し、成果を上げている。…しかしながら、学生が卒業後に教員として実際に赴任することになる学校や指導する児童生徒の実態は、附属学校園のそれとは異なっていることも事実である。」とし、公立学校園での教育実習の経験を提案した。この問題に対して、これまで社会貢献検討委員会の所掌で試行されてきた第4年次の「インターンシップ型教育実習」を、昨年度

Seiichiro Kihara, Nobukazu Matsuura, Yumiko Suzuki, Takahito Yamasaki, Noriyuki Kifune, Kinya Shimizu, Masataka Koyama, Shunzo Tashima, Tatsuhiko Shimomukai, Shinji Takemura, Yukiko Hatasa, Eiji Yanagihara, Akiko Yokota, Yoshiyasu Hamamoto, Masazou Uchida, Hiroaki Fukazawa, Yuko Okamoto, Masunori Tokinaga, Shinji Kurihara, Toru Matsumoto, Masaki Jinno, Yasuhiro Omatsu, Jyunji Kanamaru, Yoshifumi Kono, Ryozeou Harada, Yasushi Shimamoto, Kazushige Kimoto, Yoshiro Mito, Koji Takemori, Susumu Kono: An Enforcement of 'Distinct Teaching Practice' at Hiroshima University (I)

から教育実習部会の所掌として実施した。

ただし、当初の構想で2年次に提案されていた小学校での「近隣公立学校における観察参加等」や「隣接校種の参観」、中・高等学校での「定期的に学校を訪問」、さらに3年次に構想されていた小学校と中・高等学校での「近隣公立学校の教育実習」は、今後の課題として残されている。

(2) 研究の目的

本稿の目的は、今年度本格的に実施された「特色ある教育実習プログラム」の実施に関して、「教育実習

入門」の効果に焦点化して報告することである。「教育実習入門」は以下の2点で「特色ある教育実習プログラム」の柱になるものと思われる。第一に、小学校及び中・高等学校の双方の教育実習として入学直後の1セメスターに置かれたこと、第二に、授業とされたため目標や内容、成績評価の計画が明示されたこと、である。そこで、「特色ある教育実習プログラム」の本格的実施にあたり「教育実習入門」にひとまず対象を絞りその効果を報告することとした。

(文責：木原成一郎)

表1 小学校教育実習の4年間

1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生
ふれあい型	学校参加型	実習型	インターンシップ型
○「地域教育実践Ⅰ」「地域教育実践Ⅱ」 (フレンドシップ事業) →子ども理解, 学校理解	○「小学校教育実習観察」3年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験	○現行の教育実習継承	○就職直前実習 (近隣公立学校)
入 門 型	○近隣公立学校における観察参加等 ○隣接校種の参観 〔「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施〕	○近隣公立学校の活用〔「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施〕	リサーチ型 ○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動
○「小学校教育実習入門」 →学校の授業参観なども含む			

表2 中・高等学校教育実習の4年間

1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生
入 門 型	学校参加型	実習型	インターンシップ型
○「中・高等学校教育実習入門」 →学校の授業参観なども含む	○「中・高等学校教育実習観察」3年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験(平成19年度は3年生で実施)	○現行では4年生(7セメと8セメ)の教育実習を3年生(6セメ)に移行して実施	○就職直前実習 (近隣公立学校)
	○「学校」を知る, 「生徒」を知る。授業は行わず, 定期的に学校を訪問する。〔「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施〕	○近隣公立学校等で補充的教育実習〔「特色ある教育実習プログラム」として構想されたが未実施〕	リサーチ型 ○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動

2. 「小学校教育実習入門」の成果と課題

2. 1 大学側からの見解

(1) 実施概要

平成19年度の「小学校教育実習入門」は、1回の学校体験とその事前・事後指導のみで実施された平成18年度の試行の成果を踏まえ、教育実習に関する1セメ開講の授業科目(初等教育教員養成コースの学生は必修)として実施された。当初の計画では、小学校教育に関する学生の理解を図るための数回の講義と、2回の学校体験及びその事前・事後指導を含む、計15回の授業が構想されていた。しかし、麻疹の流行に対する

対応が急遽必要となったため、予定していた1回分の学校体験が中止になるなど、当初の計画を部分的に変更せざるを得なくなり、結果的には計14回の授業として実施された。実施された授業の各回の主な内容は以下の通りであった。

- 第1回 全体オリエンテーション
- 第2回 小学校教育の特色と課題
- 第3回 小学生の一日と学校生活
- 第4回 小学校教育における教科等の指導
- 第5回 小学校における特別支援教育
- 第6回 授業以外の教員の業務

- 第7回 授業の見方とその実際
- 第8回 授業観察の要点
- 第9回 学校体験事前指導
- 第10/11回 学校体験（*授業2回分の扱い）
- 第12回 学校体験事後指導
- 第13回 ポートフォリオ整理
- 第14回 まとめ

以上のうち、附属小学校3校の教員が中心となって展開されたのは第10/11回であった。また、第3回と第9回は大学の授業担当教員と附属小学校3校の教員により、そして他の回の授業は大学の授業担当教員により実施された。昨年度の試行の反省を踏まえ、本年度は学生が観察する授業の学習指導案が学校体験の1週間前に当たる第9回の授業時に配布され、これによって学生は授業の概要や当日の留意点などに関する具体的な説明を事前に受けることができるよう改善された。また、第10/11回の学校体験当日は、朝の会と第1校時の授業の観察ののち、昨年度よりも長い1校時分の時間を割いて授業者の教員を囲んで協議会が実施され、観察した授業をめくり質疑が行われた。

なお、昨年度の学校体験の試行に参加したのは初等教育教員養成コースの学生のみであったが、本年度は初等教育教員養成コースの154名と特別支援教育教員養成コースの32名、計186名が受講した。受講者数が増えたこともあり、本年度、学校体験のために提供された授業本数は、附属小学校3校全体で8本となった。

(2) 成果と課題

以下では、最終回の授業終了時に実施した小学校教育実習入門の「学校体験」に関する質問紙調査の結果を示しながら、本年度の成果と課題について検討する。その際、本年度の調査とほぼ同様の調査が昨年度の試行時にも実施されているので、その報告（木原成一郎他、2007）と適宜対比しながら述べていくこととする。なお、今回の調査には受講生の95.2%にあたる177名から回答を得た。

①学校体験実施前の受講生の意識

学校体験実施前の学校体験に対する学生の期待感を

5件法で尋ねた質問に対する回答結果は、表3の通りであった。表3からわかるように、3つの項目とも評定平均値が4.5以上で、しかも肯定的な回答の学生（評定尺度が5と4の回答者の合計。以下同様。）の割合はいずれの項目においても90%を上回っていた。これらことから、学校体験に対する受講生の期待感は非常に高かったと言える。この点は昨年度の調査結果と同じであった。

本年度の調査では、Ⅱア～Ⅱウに示した以外のことで学校体験に期待していたことは何かについても、自由記述式で回答を求めた。その結果、学校や教室の様子・雰囲気観察、児童との触れ合い、教師の指導（授業と授業以外）のしかたの観察、教師の話を聞いたり教師と話をしたりすることといった点が回答されていた。結果的に見れば、児童との触れあいを除けば、他の事柄はいずれも今回の学校体験において実質的に実現されたものであった。

②学校体験実施後の受講生の意識

学校体験実施後の学校体験に対する学生の意識（質問項目Ⅲア～Ⅲカ）と、学校体験の前に行われた一連の授業に対する学生の意識（Ⅲキ）を5件法で尋ねたところ、表4のような結果となった。

まず、学校体験が有意義だったかどうかを尋ねたⅢアの評定平均値は4.72と極めて高く、肯定的に評価した学生も約94%を占めていた。また、イメージや理解が深まったかどうかを「小学生」「教員の仕事」及び「授業」のそれぞれを対象として尋ねたⅢイ～Ⅲエにおいても、評定平均値が4.3～4.5と高く、肯定的に評価した学生の割合も86～94%と高い範囲であった。なお、これらの項目に関する回答の数値は、昨年度とほとんど同じであった。

このような数値の高さは、質問Ⅳとして「教員を目指すに当たって学んだこと、刺激になったこと、新たに決意したこと」を自由記述で回答させた結果からも伺うことができた。すなわち、質問Ⅳでは、児童の実態が様々な観点から観察することができたことに加えて、特に授業の構想・実践を担う教師に関して、授業の準備や工夫、子ども理解を踏まえた意図的で細やか

表3 学校体験実施前の受講生の意識

項目	評定尺度					平均値 (SD)
	5	4	3	2	1	
Ⅱア 小学校に行くのが楽しみだった	136 (76.4)	26 (14.6)	9 (5.1)	5 (2.8)	2 (1.1)	4.62 (0.80)
Ⅱイ 授業を観察するのが楽しみだった	117 (65.7)	48 (27.0)	7 (3.9)	4 (2.2)	2 (1.1)	4.54 (0.78)
Ⅱウ 小学生の様子を観察するのが楽しみだった	135 (75.8)	30 (16.9)	7 (3.9)	4 (2.2)	2 (1.1)	4.64 (0.76)

[注] 評定尺度は「5. そう思う」「4. 少しそう思う」「3. どちらでもない」「2. あまりそう思わない」「1. そう思わない」の5段階で、上段は回答者数、下段の（ ）内は全回答者に占める百分率を示す。

な教授活動、授業のスキルやヴィジョンなど、受講生にとって様々な学びがあったことが回答されており、今回の学校体験が、受講生が教師の視点に立って考え始める契機となったことを読み取ることができた。

次に、教員への志望動機の高まり(Ⅲオ)や教員を目指す上での自分の課題の明確化(Ⅲカ)に関しては、ともに評定平均値が3.9前後で、肯定的な評価の回答者も70%前後に留まった。昨年度の試行時の結果と比較すると、Ⅲオの評定平均値は昨年度より0.45低下し、肯定的な評価の回答者も約16%減少した。このような結果には、優れた授業実践を実現するために教師には高い能力が求められることなどをより深く知ることによって、逆に自分の能力や可能性に対する不安を抱いたことなどが関係しているのかもしれない。それを伺わせるような学生の意識は質問Ⅳの回答においても散見されたが、今回の調査だけでは要因を明らかにできない。なお、課題の明確化に関する回答結果については、教員を目指す学びを始めたばかりの1セメという時期を考えれば、妥当なものであると考えられる。

以上の結果を総合して判断すると、本年度の学校体験は教員を目指す受講生にとっては極めて有意義なものであり、とりわけ「小学生」「教員の仕事」及び「授業」に関する受講生のイメージや理解を深める点で十分な成果があったと考えることができる。

さらに、学校体験の前に位置づけられていた一連の授業の有用性(Ⅲキ)については、評定平均値が4.00、肯定的に評価した者が約78%であった。これらの数値はⅢア～Ⅲエほどではないものの、一連の授業の有用性を示すものであると言えるだろう。ただし、授業改善に関する要望を回答させた質問Ⅴでは、複数回の授業観察や公立校での観察を求める意見の他、ポートフォリオの形式・作成等に関する改善を求める意見が認められた。前者については、2セメ開設の「教職入門」

における公立校での授業観察と連携させていくことで対応可能であろう。後者は、授業担当教員による総括に際してもその工夫や改善の必要性が指摘された点である。この点に加えて、学校体験前の一連の授業の実施の形態・方法として小グループでの活動や学生相互の考えの交流を十分に実現できなかった点などについても改善をはかり、来年度の授業計画と実施方法に反映させていくことが必要である。(文責：山崎敬人)

2. 2 附属学校側からの見解

(1) 附属小学校

昨年度の試行を踏まえ、今年度から教育実習に関する授業科目の一つとして実施された「小学校教育実習入門」であるが、不測の事態(学生を乗せたバスの到着が遅れ、予定していた朝の会の参観が出来なかったこと)が起こったものの、次のような声からも窺えるように、十分な成果があったと評価してよいであろう。

《「学校体験」日の授業担当者(社会科)の声①》

参観の態度は真面目で、単にメモを取るだけでなく、教師や子どもの様子を観察しようと心がけていた。授業後の協議会では、授業の内容に関する質問を含め、予想以上に多くの学生から質問があった。授業者としても十分な手応えを感じることができた。

《「学校体験」日の授業担当者(音楽科)の声②》

参観者(学生)の態度は真面目であった。授業後の協議会では、音楽科の授業内容について補足説明を行ったが、そのことについて多くの質問を受けた。授業における子どものありのままの姿を、好感をもって受け止めていた。

《「学校体験」日の引率者(大学教員)の声》

授業観察・協議会を終え、ほとんどの学生が、大学の講義では見せたことのない良い表情をしており、充

表4 学校体験実施後の受講生の意識

項目	評定尺度					平均値 (SD)
	5	4	3	2	1	
Ⅲア 学校体験は、教員を目指すものとして有意義だった。	141 (79.2)	27 (15.2)	7 (3.9)	3 (1.7)	0 (0)	4.72 (0.62)
Ⅲイ 学校体験によって、小学生についてのイメージや理解が深まった。	88 (49.4)	66 (37.1)	17 (9.6)	6 (3.4)	1 (0.6)	4.31 (0.82)
Ⅲウ 学校体験によって、教員の仕事についてのイメージや理解が深まった。	97 (54.5)	68 (38.2)	12 (6.7)	1 (0.6)	0 (0)	4.47 (0.65)
Ⅲエ 学校体験によって、授業についてのイメージや理解が深まった。	104 (58.4)	64 (39.0)	9 (5.1)	0 (0)	0 (0)	4.54 (0.59)
Ⅲオ 学校体験によって、教職への志望動機が高まった。	66 (37.1)	53 (29.8)	42 (23.6)	10 (5.6)	6 (3.4)	3.92 (1.07)
Ⅲカ 学校体験によって、教員を目指す上での自分の課題が明らかになった。	49 (27.5)	78 (43.8)	33 (18.5)	13 (7.3)	5 (2.8)	3.86 (0.99)
Ⅲキ 学校体験の前に行われた授業は、実際の学校体験に先立ち、予備知識として役立った。	62 (34.8)	77 (43.3)	20 (11.2)	15 (8.4)	4 (2.2)	4.00 (1.00)

[注] 評定尺度は「5. そう思う」「4. 少しそう思う」「3. どちらでもない」「2. あまりそう思わない」「1. そう思わない」の5段階で、上段は回答者数、下段の()内は全回答者に占める百分率を示す。なお、ⅢカとⅢキの項目は平成18年度の調査では未実施。

実した時間を過ごしたことが窺えた。(中略) 学生の素朴な質問にも丁寧に、熱心にご指導いただき、学生の意欲向上につながったと思う。協議会会場から玄関に至るまでのわずかな時間にも、「来て良かった」という学生の声を多数聞くことができた。

高校を卒業し大学生になってから数ヶ月しか経っていない時期に実施される「小学校教育実習入門」である。授業を観る眼が育っていない、協議会での質問が的はずれである、等の指摘をする必要はない。4月のオリエンテーションの時に感じられた高校生気分も、「小学校教育実習入門」という授業科目固有の問題ではないであろう。

今年度のような真摯な態度で小学校の教育現場を垣間見ることによって、以後の教育実習に対する構えを少しでも形成することができれば、一応の成果をあげたと言ってよい。

今後、受講者増に対する附属学校側の対応(学生の居場所、公開授業数、等)について検討すべき課題はあるものの、学部と附属学校が連絡を密にとり合い、互いの指導内容についての情報交換を行ったり、指導の役割の明確化をいっそう進めたりすることによって、この「小学校教育実習入門」はますます実りあるものになるであろうと考えられる。(文責:神野正喜)

(2) 附属東雲小学校

本年度の小学校教育実習入門は「はしか(麻疹)」の影響で、1回しか実施できなかった。特に中止となった第1回目では、本校の特色である「複式教育」の授業をもとに小学校教育に関する話を進める予定であったため残念でならない。複式の「異学年異内容」の授業は、複式を知らない実習生にとって大きな刺激となっていたであろう。実施できていれば、授業を進める上での原点にふれることができていたものと考えられる。この点については、来年度の教育実習入門でもぜひ計画していきたいと考える。

第2回目の参加学生は76名であった。低学年算数・中学年国語・高学年国語と基礎教科における観察実習は、実習生にとって小学校の授業を思い出させるよい機会になったものと思われる。当日は、朝の会や早朝活動を観察する時間を設けることができ、実習生自身の小学校生活と重ね合わせて、小学校教育実習へのイメージづくりができたものと思われる。

昨年度の試行時と大きく違ったのが、実習生の意識の高さである。これは大学の指導もあったと思われるが、目的をしっかりとって参加することの重要性を示していると思われる。授業を観察する姿勢が真摯になり、協議会でも自分の質問を出すことができていた。

何のために附属学校に来ているのか、自分はこの体験をもとにどうしていきたいのか、明確な目的意識をもっていていると思われる実習生が多く見られた。ただ、教育実習入門ということもあり、授業の核心に迫る質問や意見はあまりみられなかった。授業を見る目を養うためにも、今後は前期2回、後期2回くらいの観察実習の機会を設けることも視野に入れて検討していきたい。回を重ねて授業にふれることは、実習生の意識や能力を高めていくものと思われる。

また、事前に学習指導案を提供したことは、授業の目的や展開を参考に、あらかじめ実習生がイメージをもって観察することができ、実際の授業観察を有意義にさせたものと考えられる。この点に関しても、継続して取り組んでいきたい。

本年度の日程は、授業観察と協議会をそれぞれ1本ずつという午前中のみでの開催であった。これは、学生の集中力を継続することができ効果的であったと思われる。さらには、学生の控え室を心配することもなくスムーズな運営ができたと考える。今後も半日開催で継続した取り組みを行っていきたい。

今回の実習は、1クラスあたりの実習生の人数が約25名であり、教室の広さや協議会の充実から考えてもリミットであろう。できれば、1クラス20名前後でありたい。(文責:大松恭宏)

(3) 附属三原小学校

夢と希望に溢れた学生72名が、引率の大学の先生とともに本校体育館に集まった。本校では、低、中、高学年で三つの学年で授業を公開した。さらに、授業後に授業についての協議会を実施した。

そこで、ここでは授業に参加して学生が何を感じたかと協議会に参加して学生が何を感じたかを述べることにする。

①授業に参加して、学生が感じたこと。

- ・現場の授業を見ることで、先生方がよく工夫していることや子どもの授業への参加の様子がよく分かった。
- ・子どもに興味を持たせるために、教材を工夫したり、グループで考えさせたり競争させたりといった教師の工夫が勉強になった。
- ・小学校の授業を初めて客観的に見た。現場の授業を子ども側でなく先生側で見ることが出来とても勉強になった。
- ・改めて、教師の難しさと面白さ感じた。子どもが面白いと感じた。

②協議会に参加して、学生が感じたこと。

- ・自分で気づけなかったこともみんながいろいろ発表

していて、考えが深まった。

- ・自分以外の考えが聞け、そのことにより自分の考えが修正できた。
- ・授業を先生側の視点から見るのに大変役立った。
- ・先生がどのような意図を持って発言していたのか、授業を進めていたのかということが詳しく分かり、とてもためになった。

と言う意見や役だったという気持ちとともに、今後の大学生活にどう生かすかという学生の緊張感のようなものを感じた。その中でも、学習指導案を初めて見た学生もあり、教育が計画的であり目標を持って進められていることに気づいたことは大きい。「授業観察をやらせてもらって本当に有り難うございました。将来のための課題や目標が見つかりました。この経験をしっかり生かしていきたいと思います。だから、来年も後輩達のためにこの授業観察をお願いします。先生になるための勉強をしっかりと良い教師になりたいと思います。」と感想を述べている学生が多くいる。今のこの時期だからこそ、新鮮であり、感動が大きいのだと思う。“絶対教師になるぞ”“先生になってこんな授業をするぞ”と言った意欲と感動を彼らに持たせられることは、この教育実習入門のねらいとするところである。2年次、3年次の実習を充実させるためにも。(文責：金丸純二)

3. 「中・高等学校教育実習入門」の成果と課題

3. 1 平成19年度の実習の概要

本年度(平成19年度)は、昨年度(平成18年度)の1 Semesterに第二類と第三類の6教科で行った試行的取組の成果と課題を踏まえて、1 Semesterに教育学部第二類から第五類の1年次生295名を対象にして、全10教科(国語59名、社会53名、数学27名、理科31名、音楽22名、美術8名、保体31名、技術8名、家庭20名、英語36名)で中・高等学校教育実習入門を本格的に実施した。この1年次の教育実習入門はまさに「入門型」の実習であり、その目的は、附属学校教員による「すぐれた授業」の観察と討議などを通して、学生の「生徒から教師への意識の転換」を図り、教職に対する意欲を向上させることである。

昨年度の試行的取組の主な課題として、中・高等学校教育実習入門の目的を明確にし、附属学校での授業観察を開始するまでの事前指導において、基本的な授業の構成、授業観察の視点、学習指導案の見方及び観察態度などの最低限のマナーを教えることが重要であるということが明らかになった。そこで、本年度は、以下のような実施計画を立て、各教科にTAをつけるとともに、授業観察の視点を明記した「観察録」

を作成した。

- 第1回(4月11日):全体オリエンテーション
- 第2回(4月18日):授業及び授業観察に関する講義
- 第3回(4月25日):東雲・福山の附属学校の説明
- 第4回(5月9日):三原・皆実の附属学校の説明
- 第5回(5月23日):教科別ガイダンス
- 第6回・7回(5月30日):附属中・高等学校訪問
- 第8回(6月6日):附属中・高等学校の授業に関する教科別討議
- 第9回・10回(6月27日):附属福山中・高等学校訪問
- 第11回(7月4日):附属福山中・高等学校の授業に関する教科別討議
- 第12回・13回(7月11日):附属東雲中学校または附属三原中学校訪問
- 第14回(7月18日):附属東雲中学校または附属三原中学校の授業に関する教科別討議
- 第15回(7月25日):まとめ

このように、第1回から第5回までは大学における事前指導、第6回から第14回までは3附属学校における授業観察と大学における授業討議、そして第15回は大学における総括を計画していた。しかしながら、はしか(麻疹)流行に伴う緊急対応として、6月14日の決定により、この実施計画の大きな日程変更を余儀なくされた。その結果、残念ながら、第6回・7回(5月30日)の附属中・高等学校訪問と第9回・10回(6月27日)の附属福山中・高等学校訪問が中止となり、学校訪問は第12回・13回(7月11日)の附属東雲中学校または附属三原中学校の1回だけとなった。したがって、以下では本年度の中・高等学校教育実習入門の効果を事前・事後の意識調査やレポート(観察のまとめ)の結果を分析するなどして検討するが、こうした計画と実施との間に止むを得ないズレが生じたことに留意する必要がある。(文責：小山正孝)

3. 2 大学側からの見解

ここでは、教育学部第二類から第五類の1年次生295名を対象にして実施した中・高等学校教育実習入門の成果と課題を、事前・事後の意識調査やレポート(観察のまとめ)の結果を分析・検討することによって明らかにする。

(1) 意識調査結果から

受講生には(1)入学動機5項目、(2)教職関連科目に対する興味6項目、(3)学業一般に対する取り組み方5項目、(4)将来の見通し1項目、(5)適切な授業観察回数1項目の計18項目からなる調査用紙

を講義の第1回目および第15回目に配布し調査を行なった。(1)～(3)については、学生の調査時点での心情が各項目の示す内容に「当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」のどれに最も近いかを選択させ、(4)については、「はやく先生になりたい」、「はやく仕事(教師以外)に就きたい」、「大学院に進学したい」、「卒業しても定職に就きたくない」、「まだ決めていない」、「その他」、のいずれかを選択させ、さらに(5)については、事後調査において、適切だと思われる授業観察の回数について回答させた。収集された調査の回答者は事前287名(受講生の97.3%)、事後277名(同93.9%)であり、事前・事後とも90%以上の受講生が回答している。

まず、受講生の(1)入学動機について、事前調査のみの結果について明らかにする。学生が本学教育学部に入学した動機について、「教師になるのに最適な大学であるため」、「自分の就きたい仕事(教師以外)に有利であるため」、「学びたいことが学べる大学であるため」、「成績などの実力にあった大学であるため」、「先生や親などに勧められたため」の5項目を提示し、各項目について、どの程度当てはまるかを回答させた。その結果を表5に示す。「教師になるのに最適な大学であるため」、及び「学びたいことが学べる大学である」という設問に対して、「当てはまる」と回答したものがおよそ2/3であり、「やや当てはまる」という回答も含めると、90%前後の受講生が、本学部の教育内容に対して、教師になるために必要なかつ最適な学問を提供していることを期待しているのがわかる。

表5 本学部入学の動機(数値は%)

項目	当てはまる		やや当てはまる		欠損値
	はまる	あまりはまる	はまる	はまる	
教師になるのに最適な大学	4.2	8.0	18.8	68.6	0.3
自分の就きたい仕事(教師以外)に有利	20.6	28.6	27.2	23.7	0.0
学びたいことが学べる大学	0.7	2.4	32.4	64.1	0.3
成績などの実力にあった大学	4.9	19.9	44.3	30.0	1.0
先生や親などの勧め	18.8	22.6	39.4	18.1	1.0

次に、事前と事後における教職関連科目に対する興味の変化について明らかにする。本学が提供する教職用の科目として用意されている「生徒の心身の発達に関する科目」、「生徒指導やカウンセリングに関する科目」、「教科の指導法に関する科目」、「教科の専門内容に関する科目」、「特別活動の指導法に関する科目」、「教育実習に関する科目」について、興味があるか否かを「当てはまる」から「当てはまらない」まで4段階で質問した。その事前・事後調査における受講生の回答結果は次の表6に示す通りである。

いずれの科目・選択肢をみても、5ポイント以上の

表6 講義に対する興味の事前・事後比較(表内の数値は%)

項目	調査	当てはまる				欠損値
		まる	やや	あまり	ない	
生徒の心身の発達に関する科目	事前	44.6	40.4	13.2	1.7	0.0
	事後	39.4	41.5	16.6	2.2	0.4
生徒指導やカウンセリングに関する科目	事前	51.2	35.9	11.5	1.4	0.0
	事後	46.6	40.1	11.6	1.8	0.0
教科の指導法に関する科目	事前	62.7	28.9	6.6	1.4	0.3
	事後	64.3	27.1	6.1	2.5	0.0
教科の専門内容に関する科目	事前	71.1	23.0	5.2	0.7	0.0
	事後	74.4	18.1	5.1	2.2	0.4
特別活動の指導法に関する科目	事前	28.6	49.5	20.6	1.4	0.0
	事後	27.8	49.5	19.1	3.6	0.0
教育実習に関する科目	事前	46.7	36.6	14.6	2.1	0.0
	事後	44.8	37.9	13.7	3.6	0.0

変化のある興味の変化は見られない。つまり、マクロ的には今回の教育実習入門において、劇的な効果はみられなかったものと思われる。

さらに、学業一般に対する取り組み方について、本「教育実習入門」の事前・事後の変化について明らかにする。学業一般に対する取り組み方として、本「教育実習入門」以外での大学の授業に対する取り組み方について、「授業には必ず出席している」、「授業などに遅刻しない」、「授業態度はまじめである」、「専門教科に関する勉強を自主的に行なう」、「専門に関する本や雑誌を読んでいる」の各項目について、上記同様「当てはまる」から「当てはまらない」まで4段階で回答させた。その結果を示すものが表7である。

表7 学業一般に対する取り組みの事前・事後比較(表内の数値は%)

項目	調査	当てはまる				欠損値
		まる	やや	あまり	ない	
授業には必ず出席している	事前	63.4	28.6	7.3	0.7	0.0
	事後	63.2	30.3	6.1	0.4	0.0
授業などに遅刻しない	事前	62.0	27.2	9.4	1.4	0.0
	事後	52.7	33.6	11.2	2.2	0.4
授業態度はまじめである	事前	26.5	57.1	16.0	0.3	0.0
	事後	30.3	57.0	10.8	1.1	0.7
専門教科に関する勉強を自主的に行なっている	事前	15.3	29.6	42.9	12.2	0.0
	事後	13.4	42.6	34.3	9.4	0.4
専門に関する本や雑誌を読んでいる	事前	13.2	21.6	43.2	22.0	0.0
	事後	10.5	31.0	40.1	18.1	0.4

5ポイント以上変化したものに注目すると、「授業などに遅刻しない」について、「当てはまる」とするものが事後において10ポイント近く減少しており、「やや当てはまる」が6.4ポイント増加しているという点で授業参加に対する意欲の低下がやや見られる。しかしながら、「専門教科に関する勉強を自主的に行なう」ことについては、「やや当てはまる」が13ポイント増加し、また、「専門に関する本や雑誌を読んでいる」についても、「やや当てはまる」が10ポイント近く増加していることから、自主的に専門知識を増やそうとする意欲の向上は見られることがわかる。

次に「将来の見通し」に対する事前と事後の変化について示したものが以下の表8である。

表8 将来の見通しについての事前事後比較 (表内の数値は%)

選 択 肢	事前	事後
はやく先生になりたい	42.2	36.5
はやく仕事(教師以外)に就きたい	6.6	7.6
大学院に進学したい	17.4	19.1
卒業しても定職に就きたくない	0.0	0.4
まだ決めていない	29.3	28.5
その他	4.5	5.8
欠損値	0.0	2.2

上記同様に5ポイント以上の変化に着目すると、「はやく先生になりたい」を選択したものが5.2ポイント減少しているのがわかる。このことから、本「教育実習入門」を通じて、教師になることに対して、より慎重な態度が表れ始めていることがわかる。

次に、事後調査において調査した「適切な授業観察の回数」についての回答結果を以下の表9に示す。授業観察の回数に関しては、当初3回の予定がはしか(麻疹)対応のため1回だけということになってしまったが、今回のように1回でよしとする学生は6%未満で、90%以上の受講生は2回以上の複数回の授業観察を希望していることがわかった。

表9 適切な授業観察の回数

	回答%
0回	0.7
1回	5.8
2回	45.1
3回	48.0
4回	0.4

(2) レポート(観察のまとめ)の記述から

受講生に対しては、7月25日の第15回授業「まとめ」の際に、レポート課題として観察録に①入門から学んだこと、②これからの教育実習等で取り組んでみたいこと、③入門の良かった点と改善点のそれぞれについて自由記述にて提出させた。本授業科目「教育実習入門」の効果を検証するため、ここでは、2学生の「①入門から学んだこと」に関する記述を以下に示す。

このレポートを、「教育実習入門」の授業目的に視点をおいて分析すると、Aについては下線①、Bについては下線⑤において「生徒から教師への意識の転換」が図られており、またAの下線②やBの下線⑥のようなコメントから、学生の注意が授業の構成へと移転していることが読み取れる。また、Aの下線③と④、そしてBの下線⑦などは、意識調査の「将来の見通し」において、事後では「はやく教師になりたい」と回答する受講生の割合が微減した理由を示すものと思われる。つまり、本授業を受けて「はやく教師になりたい」

今までは授業を受ける側で、①生徒の視点でしか授業をみたことがなかったけど、「教育実習入門」を受けて、教師の視点から授業を見て、今まであまり気にとめていなかった教師の授業のつくり方、工夫、苦労などが見え、とても勉強になった。1つの授業をつくるにも、②授業の流れを考え、使う教材や実験器具、板書の仕方を考慮し、約1時間の授業をつくっていくことは、本当に骨が折れる作業だと思った。今まで見えていなかったことがたくさん見れ、多くのことを学ぶことができた授業だったと思う。たくさん新しいことを学び、おどろくことが多かったのと同時に、③自分がまだまだ力不足であることを感じた。東雲の先生の抜け目ない授業を見て、④自分は本当に授業を行なえるのか、不安になった。

これから4年間いろんな授業や実習を通して多くのことを学び、ベストな授業を行なえるように成長していきたいと思う。朝早く起きてくるのは苦痛だったけど、この講義があつてよかったと思う。

<実習教科理科 1年次生 Aのレポートより>

1セメスターでは、専門教科の授業はあるものの、教職を意識するような授業がほとんどなかったのも、将来の目標である教師について考えることのできる授業で、とても有意義なものでした。中でも、やはり授業観察は自分にとってとても衝撃でした。⑤今まで授業を受けるだけの立場からしか見ていなかったものが、後ろに立って観察すると、さまざまなことが見えてきました。授業は生徒がいてはじめて成立するという根本的な部分から、見せつけられました。教師は生徒の様子や理解度に合わせて、でも生徒を引っ張っていかなくてはならない。⑥生徒に発言させたり、暗記、グループで話し合いなど、体を動かす授業は、とてもいい授業だと感じました。授業を観察してみて、⑦「教師」という職業がいかに大変であるか感じる事ができたし、そのために、自分はこれから相当の努力をしていかなくてはならないんだと実感しました。大学でしっかり勉強して、様々なことを経験していきたいと思えます。

<実習教科数学 1年次生 Bのレポートより>

注：下線は筆者によるもの

という学生の割合が減少したのは、決して「教職に失望した」という消極的な理由ではなく、これまで漠然としていた「教える」という仕事が、教師の考えに裏付けされているものであると認識し、その考えを学んだ上で教職に就きたいと慎重にとらえる学生が増加したためだと思われる。(文責：清水欽也)

3. 3 附属学校側からの見解

(1) 附属東雲中学校

本校における教育実習入門は、7月11日に社会科53名、理科31名、音楽科22名、保健体育科31名、技術科8名の合計145名の実習生を受け入れ実施した。実習生は教科ごとに分かれて、1時間の授業観察と1時間の協議を行った。その結果について、実習生を受け入

れた教科担当教員と実習担当・関係教員の8名に、①実習生の態度や意欲、②指導の実際、③現行の教育実習入門についての評価、④来年度に向けての改善点(自由記述)の4観点をアンケートした。

実習生の態度や意欲については、教育実習観察までに身につけておくべき知識・技能、態度などを自覚するうえで、「まじめで真剣に取り組んでいた」「問題意識をもって臨んでいた」「積極的に質問したり、意見を述べたりしていた」など、肯定的な評価が7名の教員から示された。あまり態度がよくないとの回答からは、「マナー、身だしなみが十分でない」「学ぶことへの謙虚な態度が見られない」などの意見が寄せられた。また、「(協議の際)決まった学生の発言ばかりで、学生の意識の差を感じた」との指摘も見られた。

実習生に対する指導の実際については、全く指導できなかつた・あまり指導できなかつたとの回答が6名となった。実習生への指導は、授業参観後に授業者である本校教員と質問・意見交換による協議を中心に行われた。あまり指導できなかつた理由について、「話題が技術的な内容に終始した」「指導のポイントが絞りきれなかつた」「教育現場や中学生の様子という漠然とした視点に留まった」などの指摘が散見された。また、「人数が多く収容教室の確保が物理的に困難であった」との記述も見られた。

教育実習入門の全体的な評価については、おおむねよいが3名、あまりよくないが5名であった。「早い時期に自覚を促す機会を設けることはよい」という肯定的な意見の反面、「実施時期が早く、学生の意識が低い」「目的がはっきりせず、教育実習観察との違いや関連がわかりにくい」という本実習の目的に関連した意見も見られた。また、来年度に向けての改善点に「目的の明確化、指導のポイントについての打ち合わせが必要である」「事前指導に授業者が関与し、現場と大学が一体となった実習にすべき」という意見が寄せられた。また、「人数が多く、生徒の安全上の問題がある」との指摘も見られた。教育観察実習と同様に、教員養成プログラムにおける教育実習入門の系統的な位置づけ、教育実習観察の客観的・具体的な到達目標を明確にしていくことが求められる。そして、実習生と附属学校、大学が評価基準を共有していくことが、この教育実習入門をより有意義な実習にするものと考えられる。(文責：島本 靖)

(2) 附属三原中学校

附属三原中学校で教育実習入門を担当した教員の感想や意見を整理すると、次のようになる。

① 教職について目的意識の自覚

本実習の最も大きな成果は、教職に対する目的意識を、大学入学直後という極めて早期の段階で促している点に見ることができる。それは、授業を観察する際の真摯な態度や、授業後の協議会での積極的な質問や意見の表明によくあらわれていた。このような新鮮な経験は、おそらく教職に対するあこがれや使命感を促すという点で大きな意義があるものと思われる。

② 教える立場への視点の転換

授業者でも学習者でもない、観察者という立場で授業に参加するという経験は、おそらく多くの実習生にとって初めての経験であろう。確かに友達に教えるような個人的・限定的な教授経験はあるだろうが、参観した授業のように不特定多数を相手にした集団を相手に一斉に行う教授は未経験であろう。授業では、気心の知れた友達に教えるのとは違って、知識や経験、考え方などあらゆる点で異なる子どもたちを相手にする。そのような難しさを実習生は、授業場面における小さな停滞、逸脱、予想外の展開などを見ながら感じ取ったようである。

③ 大学と附属校の連携

どのような授業を公開すべきか、また、協議会ではどんな話題を提供すべきかという点について、附属校教員の悩みは小さくない。本実習がこれからの実習のスタートとしての位置づけにあることは承知しているが、そのためにこの実習では何を学ぶのか、その目的と内容が分からないからである。大学から附属校への連絡が互いに不十分であるということもあるかもしれないが、本実習が成果を上げるためには、一方から一方への業務の連絡ではなく、互いが連携しあって実習内容をつくっていくという姿勢が大切である。

④ 実習B・実習IⅡⅢとの系統化

教育実習入門の内容を作り直していく過程で重要なことのひとつが、これまで行ってきた実習Bや実習IⅡⅢとの関連を明らかにすることである。特に、入門と形式的にはよく似ている実習Bとの違いと系統性を明確にする必要がある。実習Bは、自分が実習することを前提とした授業観察であるためか、実習生の参観の姿勢(特に観察記録)や授業後の質問・意見には優れたものが多い。これに対して、入門は、熱心ではあるが実習生の発言は「印象や感想」のレベルにとどまっている。また、実習生が気づきや意見を互いに交流しあうという姿勢も弱い。このような点が改善されれば、その後の実習がより実りあるものになるであろう。

(文責：木本一成)

4. おわりに：「教育実習入門」の成果と課題

冒頭で述べられているように、本稿の目的は、今年

度本格的に実施された「教育実習入門」に焦点化してその成果と課題を報告することであった。受講学生を対象に実施した意識調査、ならびに附属学校教員の意見等を基にそれについて考察する。

大学で実施した意識調査は、小学校と中高等学校で調査内容が異なっているため一概に比較することはできないが、小学校の方が成果が大きかったようである。小学校の調査では、「学校体験が有意義だった」に対する平均値が4.72と極めて高く、肯定的に評価した学生も約94%を占めている。また、わずか1回だけの観察であったにもかかわらず、「小学生」「教員の仕事」及び「授業」の各項目に関するイメージや理解の深まりも、平均値が4.3～4.5と高く、肯定的に評価した学生の割合も86～94%と約9割に達している。これは全体として当初の目的が十分達成できたと評価することができる。附属側からも、実習生の目的意識の高さや明確さが見られたと分析し、それが授業や協議会への意欲的な関与に繋がったと高い評価を受けている。

中高等学校の場合は、「教職関連科目に対する興味の変化」を尋ねたが、5ポイント以上の変化のある項目は見られなかった。しかし、それは「教育実習入門」や「附属学校での授業観察」の効果を間接的に尋ねたものである。学生が書いたレポート内容などを詳細に分析すると、教職意識の高まりや深まりが見られた。また、「学業一般に対する取り組み方」においても、「専門教科に関する勉強を自主的に行なう」、「専門に関する本や雑誌を読んでいる」の各調査項目について、「やや当てはまる」がそれぞれ13ポイント、10ポイント近く増加し、自主的に専門知識を増やそうとする意欲の向上が見られる。さらに附属学校からも、実習中の態度や意欲のみならず、教職に対する目的意識、教える立場への視点の転換などについて概ね好意的な評価を受けていることから、中高等学校においても一定の成果があったと解釈することができよう。

加えて、小学校、中高等学校のいずれにおいても、附属学校で「教える立場」から授業参観をしたことで、教師に求められる高度な知識や指導能力を認識し、それが不安に繋がっていることが興味深い。中高等学校の調査結果では、本学部への入学動機で「教師になるのに最適な大学であるため」に対して実に87.3%が「そう思う」と応えていることから、教員志望の強い学生が入学していると判断できる。その夢や憧れが、職業として教師を現実的に捉えた時に不安へと変わったのであろう。この不安や意識の転換を勉学意欲に繋ぐことも本実習の目的の一つであるので、否定的に捉えるべきではない。

しかし、残された課題や改善点も多い。それらを整

理しておく。

第一に、教育実習全体の中での「教育実習入門」の位置づけのさらなる明確化が求められる。附属東雲中学校が指摘している「教員養成プログラムにおける教育実習入門の系統的な位置づけ、客観的・具体的な到達目標を明確にしていくことが求められる」に尽きる。それにはマクロな視点に立って、広島大学として教員免許状を出す時点でどのような資質・能力を、どの程度まで付けておくかを明確にする必要がある。

第二は、附属学校と大学との連携強化である。小学校は「教員の目的養成」という明確な目的を持ったプログラムで実施されているために、附属学校との緊密な連携が図れているようである。しかし中高等学校は、多くのプログラムが関与していることもあり、附属学校との連携においても温度差が見られるのは事実である。さらなる連携が求められるであろう。

最後は施設・設備の問題である。受講者数が多いことに起因しているが、ここでは指摘のみに留めたい。

本年度は、「特色ある教育実習プログラム」の本格的導入の皮切りとして「教育実習入門」を実施する年であった。しかし、はしか（麻疹）流行という予期せぬ事態への対応が求められ、当初に計画した通りの実習ができなかったことは残念である。来年度は、本年度の課題を少しでも克服して、さらに効果の上がる教育実習へと改善を続けたい。（文責：松浦伸和）

参考文献

- 1) 若元澄男他 (2005) 「広島大学における『特色ある教育実習プログラム』の構築に向けて」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第33号, 2005. 3, pp. 31-40
- 2) 若元澄男他 (2006) 「『特色ある教育実習プログラム』の試行的取組」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第34号, 2006. 3, pp. 1-10
- 3) 松浦伸和 (2006) 「新入生を対象とした教育実習と教職意識との関連に関する研究プロジェクト」、『共同研究プロジェクト』, 第4巻, 2005. 3, pp. 91-108
- 4) 木村博一他 (2007) 「『特色ある教育実習プログラム』の試行的取組(Ⅱ)」、『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 第35号, 2007. 3, pp. 241-250
- 5) 木原成一郎他 (2008) 「初等教育教員養成コースにおける学生の目的意識を高める学校体験に関する研究」、『共同研究プロジェクト』, 第6巻, 2008. 3, pp. 6-17